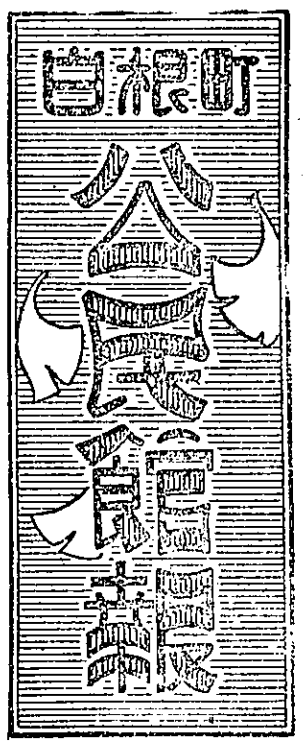


編集発行人　清水節義
新潟県中部原郡
発行所　白根町公民館
印刷所　白根印刷所

館報最終号の発刊に際して

多年、町民各位に親しまれていた白根町公民館報も、第十八号をもって廃刊する。

おもえば感慨無量である。長い年月、献身的に働いて下さった編集委員の方々、ならびに原稿を寄せられた大方の諸賢、絵画に、写真に、詩に短歌に川柳と多彩に誌面を飾らせていただいたことや、校正に、印刷に徹夜までして下さった諸氏に、心から感謝の意を表する。

創刊以来の責任者として私は微力の致すところ、公報の使命を果し得ず、幾多町民各位に御迷惑をおかけしたことを深くおわび申上げる。

しかしながら昨年も本年も県下公報コンクールに於て連続二位、三位と高位の褒賞を受けたことは、せめてものよろこびである。

×

今や縣下に誇る、人口四萬の白根町は、田園都市の理想郷建設を目ざして出発した。

明治二十三年の町村合併以来六十六年ぶりの画期的行政改革である。

近代化学文明の進歩に即応する、近代的な強力な地方自治体の確立こそ、真に住民の福祉を増進させる唯一つの道である。慶祝に堪えない。

×

白根町公民館は廃館となり新しく、九つの地区公民館と幾つかの分館をもつ、白根町中央公民館として大きく生れかわつたのである。

従って公報活動も、新たなる構想と機構を速かに整備して再生することになる。

公報活動も大きく飛躍しなければならない。

広大地域と四萬の人口を抱え産業、経済、文化と幾多の地域差をもつ住民のサービスは容易なことではないとおもわれる。

地域住民に日日の生活に必要な知識や情報をすみやかに提供し、一人一人の教養を高め、明るい新生活運動によろこんで参加して貰わねばなるまい、これが公報活動の使命である。

現下の地方の実情は、余りにも憂うべきものが多すぎはしないか、根強い封建的思想、私利私欲に走りすぎ、遠大なる理想の忘失、冠婚葬祭の改善、定時勝行の厳守等数い切れない程の問題をはらんでいる。

眞に民生を想い郷土を愛する者が相より、社会教育の発展につとめ、親和と共存の明るい民主的環境の醸成に努力しなければならない。

科学の進歩と逆に世相は全く暗い。人間相互の道義は日々後退していくのでは困る。

これを救う道はいろ〳〵あろうが、何としても迂遠なことではあるが、一般住民の教養を高める以外に施す良法はないのである。

こゝに、新しい公民館活動に大いに期待をよせるのである。

×

かげろうの立ちのぼる田園の森に、春祭りの純白なのぼりが薫風にはためいている。打ちならす太鼓の音にも平和そのものゝ響が感ぜられる。

新しい白根町よ、健康で明るく育て——と祈るのである。

（清水節義）

再び生活改善について……

今後の課題として

逆コース的虚式の廃止

一、生活様式について

生活改善——これは今日の新しい問題ではない。もはや、いくたびも叫ばれ、論じられ、主張されてきた過去の問題に属する。けれども、現在も過去のまゝの姿で放置され、その問題の解明に対して、なんらの積極性を示さず、旧態の殻の中にとじこもっているところに大きな問題が残っているのではないだろうか。

二、改善——反動

戦争中、国の生産力はすべて「戦争」という忌わしい行為に投入され好むと好まざるにかかわらず、節約の名において生活は定形化された。戦後の現在と云えども、いちぢるしく簡素化されたまゝの姿で受け継がれているけれども、物資が自由に出廻り始め、経済的にもいくらか余裕ができると、スザマシイ力をもって反動がきた。公民館、婦人会等各種団体も、その反動力を抑制すべく叫びつづけ、指導した。

しかし、運動方法が消極的であり、観念的だったために、反動力を阻止するまでに至らなかった。

そして、今日ではすっかり過去の旧い慣習に復したものも多い。それらの旧い慣習が、必要、妥当と認められるならばともかくも、進歩した現代に不必要と思われる、慣習が横行する矛盾と、頑迷に執着する姿になにかしら時代錯誤的のものを感ずる。

三、婚礼について

その最もいちぢるしい例は婚礼である。一生一度の宴には相違ないのだが、結婚する事実よりも、婚礼という形式の方が重要視されて、内容のないセレモニーに終ってしまう場合が多いようだ。婚礼はたしかに人生の華やかな門出であるし、それを祝うことは有意義である。しかし、借金をしてまでその虚式に金を費すことはあるまい。さゝやかでも、貧しくても、それがまごころを込めた祝宴であれば、実質的な祝宴であるといえる。

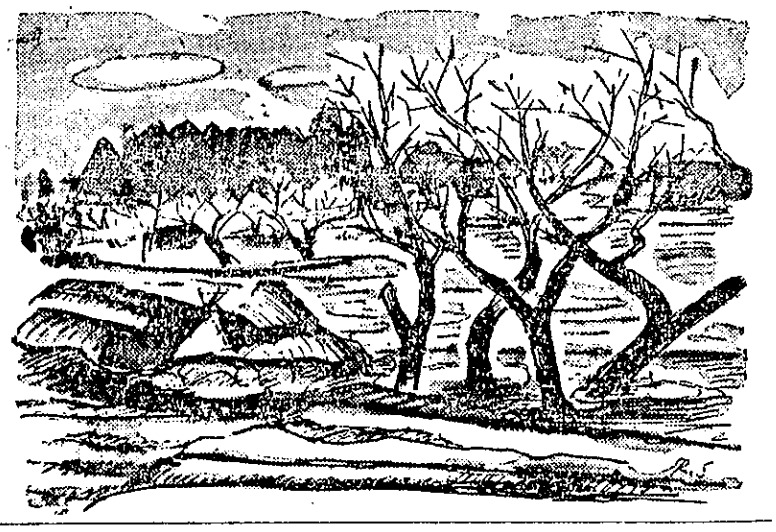
「結婚はしたいのだが式があげられないゆえに……。」こう吐息まじりに訴える深刻な若人の心境。デフレのさ中、どこの家計簿も決して豊かではない筈なのだ、結婚する本人の意志を超越して親は一生に一度だからという理由で、金策に四苦八苦する。家計に余りひびかない婚礼、それが現代にふさわしい合理的な生活様式の要求ではないのだろうか。

四、今後の方針

生活改善を論じ合い、主張する時代は終った。現在はいかにしてこの運動を具体化し、積極化して強力に推進するか、の時期にきているようにおもわれる。前回の世論調査の時も改善要望、賛成の声が圧倒的だったし、世論と、良識の要望にこたえて改善への道を開かねばならない。

婦人会、青年会、公民館等、が主体となって具体的な層の広い運動方式を討議し、推進していったならばきっと成果を挙げることができるだろうし、世論にこたえることにもなる。かってのように消極的な運動に終始することなく、旧弊に対する頑迷な執着力を打破し、新生活を打立てるべく強力な運動を展開せねばならない。

紙上デッサン展 (10)



田園の春

関根慶吉

春、新緑。木々に若芽がふくまでは、多の延長といえる。たゞ一日一日と陽ざしが小川の水を温める頃になると、乾いた土をうしろにして夢のように梅の花があちこちに咲き出す。

その頃になると、畑の麥も大分のびて、美しい緑に列を作って並ぶ。小鳥が飛ぶ。春の眺めは詩のようである。

そうこうしているうちに、町の南端、諏訪木堤上に並ぶ吉野桜もぱっと一度に花を開く。つづいて郊外の桃の花も開いてこの田園は豊麗な装えにかわる。

自然と人。私は春の諏訪木郊外が好きである。土が人の生活を愚み、純朴な心を宿らせ、眞面目に働かせ、飾り気なく、そして生活を楽しませるこの風物があり、平和で、幸福な懐しい人生を感じられるからである。そして郷土白根町の田園の美しさに、いえしれない愛着を覚える。

（三〇、四、五）

ある新聞の〝下界の風土記〟の中に、現在の小須戸町のことが確か写真づきででていた。

その中で最も私の印象に残っているのは元、小須戸町は、信濃川による川船の要所で、ずいぶん発展に富んでいたが、今日ひとたび鉄道の駅を矢代田に追いやった後国鉄の鉄道網および国鉄バス網が全国的に発達してからは、こられただちにこの課題に対し興の町に暗い影ができ、今のような状態に止っているということである。

白根町は交通の面から見ればまず辛うじて電鉄があって、小須戸町より恵まれている。

◇白根町の發展性について◇

しかし、ここに一つの課題があるとおもう。　假に国鉄であるる場合と私鉄の場合、当面の発展にどんな差異があるか。将来百年の大計の上から見た場合、捨ておかれないどいう結論がえた場合、貨物の力を借りる必要がなくなる。

これらのことが町の産業、経済、教育、交通等あらゆる面に影響を及ぼすことを考えると、この課題解決による白根町の発展性を認めないわけには行かない。

ところが、この問題は以前にも提唱され計画されたが、種々の困難や隘路があってたち消えになったと聞いている。

現在でも実現にはなはだ困難性があることは十分に考えられる。しかし今の国鉄の採算上の問題や受益地域の現状から地元民の絶えざる熱意によっては、実現可能と思われる。

また、三条市に国鉄バスの支所がある。これを動かして三条—燕—白根—新潟の線のバス運行を計画し、当局へ働きかければ、面白い事実が実現されるようにも仄聞されている。それでよいことには、バス代も国鉄の汽車賃並だそうだ。視野を広くして思索をこらせば、このほかにもより多くの発展性を含んでいることが、多くの人によって認められており、町民各位が総力を挙げ、計画し、実践へと力強く推進する時は、意外なところに、意外な発展性と、発展そのものが待っているとおもわれる。

われ〳〵の今日の生活様式は一朝にして生れたものではない祖先が何代何十代にわたって体験し、改善したところに、現在の生活様式があみ出されたのである。だから、われ〳〵の今日の生活様式の中には祖先の血が脈々として流れ、そのあみ出された様式はある特定の時代にあっては合理的であり、進歩的でさえあった。

しかし、近代の社会機構の複雑さ、その急テンポの活動力は過去の様式に対して鋭い批判を要求する。すくなくとも、生活様式を合理化するように改善しなければならない時代にきているように思われる。

言寸考尺

▼おもえば長い、曲りくねったけわしい道だった。おたがいに郷土を楽園として更生するために努力し、助け合って歩んできた道、いまそれが報いられ、九ヶ町村の合併が実現し、白根町は生れた▼この間、不快な政治的工作や、私的感情の醜闘がなかったとはいえないが、しかし、楽園に通ずる最短、最上の道を切り開くために、私利、私欲を離れ、疑念を忘れて東奔西走し、血みどろの努力をつくした人も、あるはずだ▼各町村間の意見の討議、調整は多難であったろうが、慎重審議された新町計画書に目を通したとき、いまさらながら、合併せねばならなかつた必要性を痛感させられた▼合併は成った。過去のわだかまりや、対立感情等はすてゝ、新しい町つくりのためにスタートしなければならない▼計画書の構想の実現は、決して容易であるとは考えられない。新町民が楽園建設のためにうける試練は、深い理解と協力なくしては乗切ることはむずかしい▼合併は終った。しかし、もう明日から険しい、曲りくねった長い道を汗しながら歩きつづけなければならない▼新しい町づくりのために捧げる努力が結実し、雄大なる計画書の構想が実現したとき、名実ともに躍進する大白根町となれるのだ。